

北海道胆振東部地震 厚真町追悼式

令和5年北海道胆振東部地震厚真町追悼式

胆振東部地震犠牲者之霊

北海道胆振東部地震から5年を迎え、総合福祉センターで9月2日に北海道胆振東部地震厚真町追悼式が行われました。来賓を含め参列した260人は、犠牲となった37人をしのんで哀悼の意をささげるとともに、復興から創生に向けた町づくりへの決意を新たにしました。

新型コロナウイルス感染症の規制が緩和され、会場は大集会室と青年室の2会場が設けられ、青年室には大集会室の式典の様子が放映されました。宮坂町長が式辞を述べ、鈴木知事ら来賓が追悼の辞を述べた後、参列者は、祭壇に白菊を手向け、5年の歳月を振り返りながら犠牲者のご冥福を祈りました。



厚真町 宮坂尚市朗町長

時を経てもなお最愛のご家族やご友人を失われた方々の無念さは決して尽きることはありません。地震からの復旧・復興にまい進するとともに、『挑戦を諦めない町』として未来創生と持続的発展に向けた歩みを町民一丸となって進めていきます。



北海道 鈴木直道知事

厚真町をはじめ、被災地が一日も早い復興を成し遂げ、住み慣れたまちで暮らしているように不安や課題の解決、地域に寄り添った取り組みを進めるとともに、記憶が未来に引き継がれることを誓います。

式辞・追悼の辞



厚真町議会 渡部孝樹議長

震災に思いを巡らせながら、犠牲になられた方々を追悼する気持ちや、防災・減災につなげていくべき教訓は、決して風化させることなく次世代に伝えなければなりません。被災された方々に寄り添い、まちづくりに全力で取り組みます。



遺族代表 畑島武夫さん

大切なものを失って、ようやく伝え備えることの大切さを学びました。皆さまが大切にしてきた厚真を取り戻し、犠牲になられた皆さまへの思いを含め、災害の記憶と教訓、そして日ごろの備えの大切さを風化させることなく後世に継承することを誓います。

追悼式第2部「献歌」



町の未来を願って熱唱する小寺聖夏さん

「献歌」は、犠牲者への鎮魂と復興への願いを込めた音楽による追悼式です。厚真町出身の小寺聖夏さんと、震災後町に通い続けている半崎美子さんが、総合福祉センターで魂の歌声を届けました。ステージは、静かに始まりました。白菊などで飾られた祭壇にそっと目を閉じた小寺さんは、支え合いながら前向きに生きる町民の姿を歌詞に託した「羽」などを熱唱しました。



厚真町への想いを歌い上げる半崎美子さん

半崎さんは、この日に合わせて作詞・作曲した「大地の息吹」を初披露しました。町民との出会いや景色の移ろいなどを歌詞やメロディーに重ねました。心のもった2人の楽曲は、大勢の来場者を魅了しました。ステージ終了後、町は半崎さんに「アマラバース アンバサダー」を委嘱しました。町民との交流促進や厚真の魅力発信に努めていただきます。

半崎美子さんからのメッセージ

厚真町の皆様にとっての5年という歲月、その大切な歩みの中で、復興応援ソングという形で、私に楽曲の制作を託してくださったこと、あらためて感謝の気持ちと共に、導かれるように書かせていただきました。

皆様、お一人お一人の5年の歩みはそれぞれで、環境も心境も違うからこそ、前へ進むとか立ち上がろうということではなく、普遍的な希望の歌にしたいと思いました。

この地に息づく希望の手がかりは自然が蘇生する姿であり、それは茶色く崩れた山肌に緑が戻る姿、田畑が回復する姿、黄金色に実る稲穂そのものであると感じました。

町民の皆様の生活と深く関わるそれは希望であり、時間はかかっても自然は必ず戻ってくると厚真の人達は知っているからこそ、日々を、未来を、耕し続けることができるのだと。

「私達はあきらめない」という宮坂町長の力強い言葉。

その言葉に、皆様の強く結ばれた繋がりや自然との共生を思い、「穂」や「歩」を歌詞に入れました。

そして束の間に咲く、小さな稲の花もまた希望の息吹であると。小さなお子様からご年配の方まで、町の皆様に歌っていただけるようシンプルな歌にしました。

これまでの5年、そしてこれからの厚真の皆様と、明日への歩みを共に。



委嘱状を手に応援を約束する半崎美子さん